

[25_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
25(4)

<https://doi.org/10.15017/18011>

出版情報 : 図書館情報. 25 (4), pp.27-34, 1990-01-31. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 25, No. 4 (1989)

目次

- 大型コレクション「トマス哲学の形成
—13世紀西欧哲学文献集成—」を研究者に披露 27
- トマス・アキナス研究コレクション 28
- 再び筑前・筑後の田舎版 29

大型コレクション『トマス哲学の形成と展開

—13世紀西欧哲学文献集成—』を研究者に披露



去る平成元年11月20日(月)、午後4時から本学中央図書館館長室に於て、標記コレクションの主要稀観書を披露した。

本コレクションは平成元年度の文部省大型コレクション収集計画の一環として九州大学が予算配分を受け、購入するもので約120点のトマス・アキナス(1225~1274)の研究文献資料集成であり、中世哲学の「歴史的研究」に不可欠のもので、我が国における斯学の進展に寄与するところ大なるものがあります。

当日は、高橋学長、後藤事務局長を始め平田文学部長、文系四学部の図書館商議委員会委員等、関係者多数のご列席のもとに、文学部の稲垣教授(哲学専攻)から最も代表的な当該稀観書数点を選び、その資料の価値、重要性及び当該研究分野の研究動向等について解説を受けた。

(((資料紹介)))

トマス・アキナス研究コレクション

稲垣良典

このコレクションの学問的価値を適切に評価するためには、わが国における中世哲学研究の現状に目を向ける必要がある。明治43年(1910)、当時東京帝国大学文科大学教授であったケーベル博士は『神学及中古哲学研究の必要』と題する書物で、近代思想、とりわけ啓蒙主義の思想でもって西洋の文化・思想が代表されるかのように考える浅薄な西洋理解にたいして警告を発したが、これがわが国における中世哲学研究のいわば事始めであった。しかし、幾人かの優れた先駆者たちによる紹介、啓蒙の努力にもかかわらず、「中世哲学に対する旧来先入の僻見」(同、3ページ)は根強く、本格的な中世哲学研究が始動したのは昭和20年代の半ば頃であり、昭和27年には全国的な学会である中世哲学会が発足した。わずか二十数名(しかもそのほとんどは中世哲学の重要性、したがってその研究の必要性を痛感してはいたが、厳密な意味での中世哲学の専門家ではなかった)で出発したこの学会は、現在四百人近い会員を教える。研究内容も時代的には中世哲学の源流であるギリシア・ラテン教父から、中世哲学と近代思想の両側面をあわせ持つニコラウス・クザーヌスにいたる長い期間がよくカバーされ、領域的にも中世の論理学、数学、自然学から神秘思想まで、きわめて多彩な研究が行われている。一見、わが国の中世哲学研究はいまや「花盛り」であるかのような印象を与える。

しかし、欧米における中世哲学研究の実状と比較した場合、われわれは一つの基本的な点で著しく立ち遅れていることを認めざるをえない。それは中世哲学の「歴史的研究」の分野における立ち遅れである。中世哲学研究の全体が中世という古い時代についての歴史的研究ではないが、といぶかる読者がおられるかもしれないが、ここで「歴史的研究」というのは写本の比較検討にもとづくより優れたテキストの確立や、新しく発掘した資料を駆使して行われる独創的な

研究のことである。この点でヨーロッパから距離的に遠く、異った言語圏に属するわれわれが不利な条件を負わされていることはいうまでもない。しかし、そうした不利な条件を克服し、「歴史的研究」に関しても欧米と肩を並べるような研究が続出する状況をつくりださないかぎり、わが国における中世哲学研究は欧米における研究の後塵を拝することに甘んじざるをえないのである。

このたび学内各方面の深い御理解と御協力のおかげでトマス・アキナス研究コレクションが本学附属図書館に収められる運びになったことは、欧米の代表的な中世研究所にひけをとらない中世哲学の「歴史的研究」のためのセンターをつくりたいという、われわれの年来の願いが一部かなえられたものであり、わが国における中世哲学研究の進展に寄与するところが大きいと思う。このコレクションはすでに本学図書館に収蔵されているペラ文庫、クンケル文庫のように或る学者が生涯かかって集成した蔵書ではなく、われわれ自身が、比較的短期間の間に、入手しうるかぎりでの情報にもとづいて選択し、集成した、いわば「手づくりの」コレクションである。「〇〇文庫」という出来合いのコレクションが向うからやってくるのを待つのではなく、たとえ不器用なところがあってもわれわれ自身の手で「〇〇文庫」にあたるものを作ろう、という「手づくり」コレクションの発案者は法学部の西村重雄教授であって、その意味では西村教授が本コレクションの生みの親と言ってよい。

本コレクションの内容について簡単に説明すると、まずトマス・アキナス研究に焦点を合せてコレクションを構想したのは、本学図書館がトマスの著作の刊本および最近の研究書に関してはわが国で最も充実した蔵書をすでに有しており、それを土台にするのが最善であろう、と考えたことによる。すなわち本学図書館には

1570年刊の最古のトマス全集をはじめ、重要なトマス全集はすべて備わっており、またトマス研究にとって不可欠の研究手段であるモニュメンタルなインデックス・トミスティクス（IBMの全面的協力をえて完成されたトマス全著作の用語索引）も収蔵されている。したがって、われわれとしては上記刊本以前のトマス著作のインキューナブラ、トマス自身がよりどころとした古代および中世初期の著作のできるかぎり古い版、さらに歴史的研究にとって不可欠の研究誌、叢書、などを重点的に集めることを企てた次第である。

本コレクションにふくまれている書物のうちのいくつかを紹介すると、まずトマスに関しては『命題論集(第一巻)註解』、『自由討論集』、『アリストテレス分析論後書・命題論註解』など、いずれも1470～90年代ベネツィアで印刷されたインキューナブラである。なお中世大学の神学部で広く教科書として用いられたペトルス・ロンバルドゥスの『命題論集』については16世紀の中頃ルーヴァンで発行された古い版が収められている。トマスの師アルベルトゥス・マグヌスの『神学真理綱要』のインキューナブラもあり、12世紀のアンスセルムス、ペトルス・アベラルドゥス、サン・ヴィクトールのリカルドゥスに関しても15、16世紀に属する古い版がふくまれている。このほか、トマスがしばしば引用するヨハネス・ダマスケヌス、ヨハネス・クリュソストモスの著作もいくつか古い版を確保することができた。さらに、この機会にアリストテレス、プロティノス、キケロ、ポエティウスなどに関しても古い、重要な版をできるだけ集めることにつとめ、そのいくつかを手に入れるこ

とができた。

中世哲学に関する歴史的研究を徹底した仕方で行うためには写本のコレクションが必要であることはいうまでもないが、本コレクションではそこまで手をのばすことはできなかった。かつて訪れたトロントの中世研究所にはバチカン図書館所蔵の全写本の写真版があり（同じものが米国セント・ルイス大学図書館にも収められている）、またノートル・ダム大学でもミラノ市のアンブロシアナ図書館の全写本のコピーが確保されているのを見て、いつかわれわれの図書館にもこの程度の写本コレクションを取得したいものだ、という気持がわき上ったことを覚えている。トマス研究に関しては、17世紀から19世紀にかけてぼう大な数にのぼる註解が現れており、トマス研究の歴史をたどるためには、それらの資料もできるかぎり確保しなければならないであろう。

いうまでもなく文献資料の集成は研究の第一歩、あるいはむしろその前段階であって、われわれにとっての課題はペラ文庫、クンケル文庫、さらに今回のトマス・コレクションを今後有効に利用して研究成果を挙げていくことである。しかし他面、文献資料が完備し、居ながらにして古い時代の学問に接することができるような環境においてでなければ、中世哲学研究のような学問が根付き、成長するのは困難であることも確かである。中世関係の文献資料がさらに充実し、それらを利用して中世研究の専門家を養成する制度の面でも一層の改善が為され、本学に欧米からも人材をひきつけようような中世研究センターが誕生することを切に期待するものである。（文学部教授）

再び、筑前・筑後の田舎版

中野三敏

以前、本誌(通巻126号)に「筑前・筑後の田舎版」と題して、囑目の書物を並記したことがある。その時点では僅かに五部を著録するに終って、無知をさらけ出してしまったが、その五部とは次の如くである。

1. 山園雑興 半紙本一冊 詩集 月形鶴巢著 天保三年 博多万玉堂 江戸山城屋相版
2. 君子訓 半紙本三冊 教訓 益軒著 天保十三年 夜須 佐藤氏蔵版 久留米 中沢嘉右エ門彫
3. 安産手引草 半紙本一冊 施本五百部。博多川端 越後屋藤五郎彫
4. 新板早繰年代記 大本一冊 元治元年刊 博多 藤吉右エ門彫 (当時豊前中津住)

5. 俳諧遺筆誌 半紙本一冊 俳書 文政八年黙雷居士追善 小倉 藤可堂木斎彫

それから既に八年、猶、わが田舎版発掘は遅々として進まないが、懲りずに、また経眼の書物を掲げ記してみようと思う。筑前を先に、筑後を後に掲げる。

(六) 静観樊籠詩鈔 半紙本一冊 詩集。嘉永六年版

著者は「筑前上野先生著」とあって、麻谷、上野勝従の著。内容は勝従の詩友占部氏が侍医となって江戸へ行くに当り、折悪しく病臥中の勝従は送別の宴に不参の為、代りに山陽・東海道の名勝を五十二首詠じて、はなむけとしたもの。見返しに「嘉永癸丑春新刻」「寧楽津悠然居蔵」の文字があり、嘉永六年刊。二川相近の序があるものと無いものがある。「寧楽津」は鞍手郡の地名らしく、その辺りの悠然居と称する門人の資産家の出資によるものか。勝従は中年京に遊んで若槻幾斎の門に学ぶというので、その著も京坂の刊であってもおかしくはないのに、巻末に「彫工博多中間町印刷屋吉右エ門」とあって、明らかに地元出版の、体裁も整ったしかし、みるからに田舎版の詩集である所が嬉しい。

(七) 家学小言 大本一冊 安政四年版

見返し、枠外に「安政四丁巳新鐫」とあって、枠内は「昭陽先生撰至于海隅不許翻刻 / 家学小言 全 / 翫古堂蔵」とある。又、巻末左端に「剗刷・筑前福岡浦泰成堂太四郎」とあって、これ又当地出版なること疑いもない。内容は文政七年八月、亀井昭陽が禅僧一圭上人の為に、亀門家学の要点を三十三章に纏めて書き与えたもの。遠山荷塘の名でしられる一圭は華音と月琴を良くし、江戸へ帰ってからは当代随一の唐話通として名声を博するに至るが、長崎遊学の帰途、昭陽一家との交情の濃やかさは「空石日記」に歴然と偲ばれる所である。安政丁巳孫恒撰、豊福覃書の題字二丁を除いて、全丁が昭陽の自筆板下を用いているが、その姿は既に「亀井南冥・昭陽全集」巻六に全丁影印されているので、それによられたい。因みに本書には見返し及び巻頭の恒撰文の題字二丁及び巻末彫師名などを持たず、暘州の朱筆注記が従横に加えられた試し摺かと思はれる一冊があることを明記しておく。

(八) 農家訓 半紙本一冊 寛政十二年序刊。

内題下に「北筑 法眼普山著」とあり、序は末に「寛政十二歳次庚申人日」とあるのみだが文意により普山の自序としれる。巻末には「筑州薬院 推移軒彫梓」とあるが、推移軒は未詳。全二十丁。すべて農家の心得を諄々と説くもの。自序に「或は寺院に居り、或は村長のもとの仮寝に、賤の男しつめをみつめて、農家の心得とも成らん事ともを説と言へども、毎々其席に尽し難ければ、壺冊と成してこれをその人々に施す」とあって、著者普山自身の施印したもの。普山は俳人として名高い山崎杏雨の二男で、医を業とし法眼に進む。この年七十二才。此一巻も自筆に記したと本文末にある。例の宗像郡武丸の正助略伝の著もあるという。

(九) 孝子正助伝 半紙本一冊 安政三年板

見返しに「春庵竹田先生原述 / 鋸谷井土先生補遺 / 孝子正助傳 / 安政三年丙辰季春上浣值百享薦」とあり、全九丁。巻末には「鋸谷井土周磐 録」と記す。即ち安政三年は正助の百回忌に当たるため、井戸氏が春庵の「正助伝」、梅廬の碑銘、官版孝義録中の「正助伝」、山崎普山の略伝等を取捨して新刻したもの。刊記・奥付の類は無く、博多版としての確証は無いが、その内容・板の体裁等凡て田舎版の趣きをそのまま伝えており、ここに著録する。井戸家は祖父魯燭の代から侍読をつとめる名家で、周磐は文久二年八十一才で没している。その二男に郷土史家として名をなした海妻甘蔵がある。

因みに正助伝は、前記春庵の著は享保十五年の京板、官版孝義録は勿論江戸板、それに文化三年の五十年忌、安政三年の百年忌と地元の俳人達による追善俳書が二部出ているが、何れも上方板と覚しく、本書のみを博多版とするものの如くである。

(十) 往来芝 大一冊。紀行文 嘉永五年板。

久留米藩儒樺島石梁の紀行文である。見返しに「嘉永五年八月刻 / 往来芝 / 尚友舎蔵」とあり、巻末に「嘉永五年五月 / 中澤嘉右エ門彫刻」とあるので、紛れも無く久留米版である。尚友社は無論石梁の主催する所、また刻師中沢嘉右エ門は、前記「君子訓」の彫刻にも見事な刀の冴えを見せて、

当時九州では指折りの刻師と言うべき存在である。本書が中沢彫りによる久留米版の確証を有する以上、同じく見返しに「尚友社」の蔵版であることを明記する。

(㉔) 石梁遊草 大本一冊 文化十三年板

(㉕) 石梁文集 大本五冊 文化十五年板

(㉖) 石梁文集後篇 大本五冊 文政八年板

以上の三本も、何れも刊記、奥付の類を備えぬものの、それ故に却って尚友社蔵・中沢刻の久留米版と見て良いのではなかろうか。右の三本共、初印本と覚しきものは、見返しに桃色や白の蠟箋を用い、彫り・摺り・墨色・製本、何れをとっても所謂田舎版とは思えぬ見事な出来栄を示しているが、これは先年「君子訓」を報告した時にも同じように述べた所で、中沢刻本の特徴とも言い得る。そして右の三本には何れも明らかな後印本があり、それにも刊記・奥付類は見た事がないが、此方は摺り、墨色等に紛れもない田舎版独特の調子が歴然と顕われていて、恐らく中沢氏歿後、その眼の届かぬ所での摺出しゆえかと思われる。

中沢彫りの久留米版に関しては、他にも

(㉗) 大 学

の一篇があることを、鶴久二郎氏の私信によって御教え戴いたが、これは未だ現物に接することが出来ないでいる。また鶴久氏の私信には、三瀧町小犬塚堤昭南氏御所蔵の

(㉘) 筑後孝子伝

というものがあり、これには出版当時の刊行事情が詳しく記されている旨の御教示も戴いたが、これも未だ現物の調査を怠ったままでいる。しかしこれなどは田舎版研究には欠かせぬ資料であろう事、言う迄もない。

中沢彫りの本については、今一本特筆すべきものがある

(㉙) [佚題俳書]。半紙本一冊、色摺り 嘉永二年板

所見一本のみで、題僉を欠く為、残念乍ら書名を明確にし得ないが、見返しには中央に「振鬪列」の三字が置かれ、奥付には「嘉永己酉仲春上澣 / 集者 保久志圃 / 補助 紫廣圃 / 彫刻 中沢嘉右エ門圃」と見える。全五十七丁、序題等は無く各半丁に一句づつ、凡て色摺りの絵入り俳書で、その色も緑・代赭・紺青の三色を基調に、何れもボカシや没骨法迄用いた、かなり本格的と評して良い出来栄を示す。もっとも、嘉永頃ともなれば、仙台や信州などの田舎版には「書画舫」や「薰蕕同器集」などのような、極めて本格的な色摺り絵本も出来ており、それに比べればなお残念ながら見おとりはするものの、ともかく、この中沢氏の技を中心にした久留米の出版史は、あなど難いたかまりを見せているというべきではなかろうか。右俳書奥付の中沢氏所用印は「待賈堂」と読める。或いは彫師を業とするのみならず、本屋を営んだものかもしれない。何れにせよその伝の一斑のみでも知りたいものである。因みに地域史研究所所収園田文書の中に、一枚摺の俳諧歳旦摺物が多数所蔵され、その中に「東久留米 / 中沢摺」や「久留米原三 / 刻屋八平摺」等の木記を持つ色摺りの摺り物が弘化・嘉永頃を中心に十点ほども見えることも附記しておく。

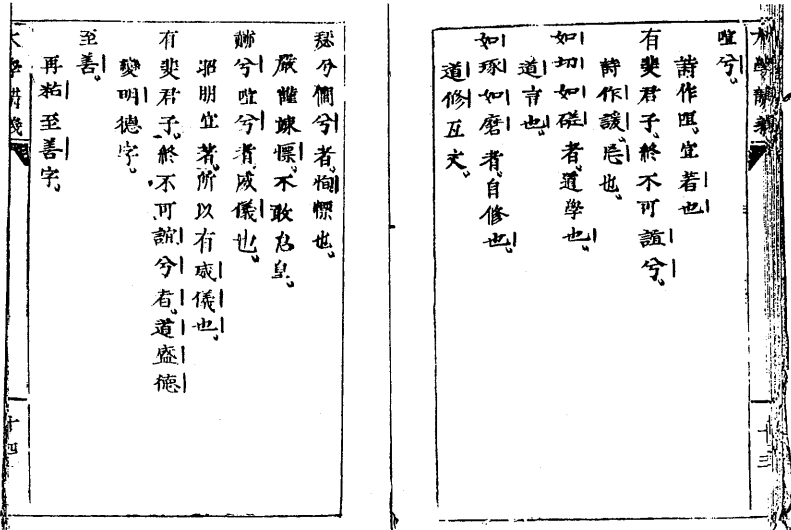
田舎版に着目した時、必ず経眼するのが所謂「近世木活」といわれる幕末の木活字印刷物であるが、筑前・筑後には余り見当らず、殆んどあきらめかけていた所、何とか数点を見ることが出来て安心した。その一は

(㉚) 和漢事類蒙求 大本二冊 嘉永七年序刊。

筑後重富鼎の著。七年八月の広瀬淡窓序、同年同月の菅原雄の跋、合わせて三丁分は整板だが、本文は凡て木活で、四周単辺、有界、九行十八字詰め、小字双行のやや大ぶりの漢字活字を用いる。内容は和漢の同類の事蹟を一对にして蒙求風に記録したもの。著者の重富氏は号繩山。初め淡窓の咸宜園に学び、後に江戸へ出て佐藤一斎に師事すると凡例に見える。とすれば本書も或いは江戸での刊かとも思えるが、板式は木活としてもかなり稚拙な姿であり、恐らくは郷里に於ける私家版と見做し得る。その意味でより確実に私家版と認められるのが次の一冊である。

(六) 大学講義 半紙本一冊

著者は内題下に「芥洲 江上源伯華父 撰」とあって、南冥門の高弟江上芥洲。板式は四周単辺、八行・十七字、全四十一丁で、序・跋・刊記等は全くない。内容は書名の示す通り「大学」の文句



「大学講義」。傍線を施した文字は手書き文字である。

を一句づつ区切ってその注解を試みたもので、恐らく芥洲の講義録そのものであるであろう。各半丁毎に百字内外の文字数で稚拙に組み上げられているが、熟視すると活字に混じって筆書きの文字がかなり頻繁に見えており、ともかく少い活字を精一杯に用いて、そのあげく、足りない文字は一字一字手書きですませた、半分木活、半分写本ともいべき書物である事がわかる。例えば十二丁の裏は全四十九字の内、活字は二十五字にすぎず、他は凡て墨筆。十三丁は全四十五字の内二十三字が活字という有様である。この書物が一体何部作られたものなのかは、いま知り得ないが、到る所空白だらけの丁をめぐっては、足りない文字を墨で埋めていく作業に没頭する芥洲門人の誰彼の姿を想像することは、殆ど感動的ですからある。

上のような例は木活版本にあっても極めて稀な例ではあるが、元来近世木活の基本は右の如く極めて私的な需要に応えるべく作られたものと見做し得るので、次の一本の如きもまたその類と見ることが出来る。

(七) 大疑録 大本四冊 文化九年再校。

内容はよくしられた益軒の著述であり、既に明和四年に大野通明校の整版本二冊がある。

そして本書は右の整版本の本文をそのまま木活に組みあげたもので、活字の無い所は空白にして、そこに朱筆で文字を補うが、その底本として用いたのは明らかに右の整版本の本文である。即ち本書は明和四年板本の写本を作る代りに木活を以てしたといべきもので、恐らくは数人もしくは数十人の学生に対し「大疑録」の講義を試みた人が、テキストとして明和四年板本を用いることにしたものの、学生全員の板本購入の費用を省く為、今でいうガリ版かコピーで人数分を揃えるようなつもりで作られたものと考えられる。

木活字本はこのように極く私的な用途に作られるものとして、そこでは板権の有無を論じられずにすむ性格を持っていた。そしてこのような軽便さが生かされて、明治に入っても十年前後迄は各県の布告や、警察署から配布する盗品リストなどに盛んに用いられた実例が、九州では特に佐賀・長崎などの肥前諸県に目立って多いように思う。その実例は又別の機会に示すことにしよう。ただ右のような木活使用の実例に即せば、大寺院や学校、官公庁などには恐らくかなりな所に木活字が

用意されていた筈と見てよく、それらを用いて刷り上げられた書冊類も必ずやあったに違いない。活字そのものについて言えば、昭和六年十一月、当時の福高で行われた書籍展観の折の目録の第五十六番に「東長寺蔵 活字一組一面」という出品が目をはく。果してこの活字で印行された東長寺版活字本が存在するのかどうか。またこの活字そのものが、今猶東長寺に残るのかどうか。東長寺に活字が用意されていたとすれば、当然聖福寺や万行寺・安国寺等にもとも考えられる。何れにしても今はその所在に関するどんなささやかな情報でも良いから、それを集積しておくべきであろうと考える。

それにしても図書館は、どうしてこのような物を系統的に集める努力を怠って来たのか、今となっては聊かのいきどおりさえ感じるものであることを取って記しておく。
(文学部教授)

◆ 会 議

第3回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)参加報告

山 田 玄 連

主 催：国立大学図書館協議会

当番館：神戸大学附属図書館

期 間：平成元年11月16日～17日

会 場：関西地区大学セミナーハウス

45大学から48名が参加して開催された。まず、「外国出版物購入価格問題調査研究班」が平成元年6月に作成した「報告書」の趣旨説明があり、その後、次のテーマについて活発な意見の交換が行われた。

外国出版物購入に関する諸問題の改善に向けて — 予定価格、契約方法、流通経路等 —

また、サブテーマとして、

1. 競争原理の導入と価格問題

2. 予定価格の算出

3. 価格格差の解消に向けて

① 流通経路の改善

(a) 外国出版物の直接購入

(b) 円建てものと並行輸入の促進

② 出版元定価における差別価格について

なお、九州大学附属図書館においても、従来の契約方法の見直しをするなど、外国出版物購入事務の改善を図るとともに、近年における急激な外国為替相場の変動に対する適切な対応が今後の課題であろう。
(情報管理課受入掛長)

漢 籍 勉 強 会 の 企 画 に つ い て

中央図書館では、本館所蔵の漢籍目録出版を計画しております。このほど、あらかじめ原稿ができたあがったのを機に、採録にあたられた文学部の教官から、中国学に関するやさしい講演をお聞聞きしながら、実地に漢籍を手にとり、知識や技術を今後の業務に役立てたいと考えました。

もともと、古典勉強会の一環として、まず、この機会を利用して漢籍をとりあげましたが、次に、別途講師をお招きして図書・西洋古典の分野へと広げ、続けてゆく予定です。

古典の知識を身につけ、この分野にも有能な多数の人材を育て、参考調査や整理業務に万全を期したいと思っております。

古典勉強会 代 表 吉 岡 千 理
 〃 世話人 落 石 清

本学教官著作寄贈図書

〈中央図書館〉

平嶋 義宏 (農・名誉教授)
『学名の話』
九州大学出版会 1989

武野 秀樹 (経)
ケインズ全集 18巻
武野秀樹, 山下正毅共訳
賠償問題の絡結
東洋経済新報社 1989

内田 照章 (農)
『こうもりの不思議』
球磨村森林組合 1985

〈教養部分館〉

秋吉 勝廣 (養)
馮 至 詩集
土曜美術社 1989

清水 展 (養)

Pinatubo Aytas : continuity and change.
Ateneo de Manila University Press, 1898.

西村 久 (養)

Prange, R.E 著 西村 久訳
量子ホール効果
シュプリングー・フェアラーク東京 1989

〈理学部〉

白水 晴雄(理) 青木 義和(理)
宝石のはなし
技報堂出版 1989

〈農学部〉

村上 浩紀 (農)
無血清細胞培養マニュアル
講談社 1989

学術雑誌総合目録と文編のデータ調査及びデータ記入説明会

〈と き：平成元年11月17日(金) ところ：九州大学附属図書館〉

学術情報センター主催の標記説明会が、広島、山口県を含む九州・沖縄地区62機関81名出席のもとに開催された。

この説明会は、「学術雑誌総合目録と文編」の改訂作業を行うためのものである。

今回の全国調査の目的は、

- 1) 先の全国調査以来6年を経過したデータベースの内容を最新のものにする。
- 2) オンラインによる総合目録データベースの形成を図る。
- 3) 改訂期間の短縮化を図る。

特徴としては、いわゆる雑誌のほか、年鑑、年報、白書、統計も含めてこれまでの雑誌の目録から逐次刊行物の目録をめざして、約60,000タイトルの収録が予定されている。

この改訂版の刊行は平成4年3月の予定である。

なお、本学からは末次第目録情報掛長、木村システム管理掛員、三浦医学分館参考調査掛員、森松教養部分館目録掛長が出席した。

また、この説明会を受けて、学内各部局担当者を対象に平成元年11月28日(火)中央図書館に於て説明会を実施した。

◆ 日 録 (平成元年10月~12月)

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 10.19 国立大学図書館協議会受賞者選考委員会及び理事会 (大阪於) | 議 (東京於) |
| 11. 7 第22回国立七大学附属図書館部課長会議 (東京於) | 11.16~17 第3回国立大学図書館協議会シンポジウム (神戸於) |
| 11. 8 第63回国立七大学附属図書館協議会 (東京於) | 12. 6 福岡市民図書館協議会 (福岡於) |
| 11. 9~10 平成元年度国立大学附属図書館事務部長会議 | 12.12 箱崎地区運営委員会(仮称) (図書館会議室於) |
| | 12.22 全学図書系掛長会議 (図書館会議室於) |

編集委員 主査・辻本 和央, 委員・天野 二郎, 大神 義生, 青柳 良輔(中央図書館), 保田 秀人(医学分館), 森松 睦雄(教養部分館), 久保 昭夫(工), 下川 幸士(経)

九州大学図書館報「図書館情報」 Vol. 25, No. 4 (通巻156)

1990年1月31日・発行人 吉岡千里

発行所 九州大学附属図書館・〒810福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線 2454